

地質学者小林貞一の「ジオサイエンス」概念の背景

Background of the Geologist Teiichi Kobayashi's Conception of 'Geoscience'

*山田 俊弘^{1,2}*Toshihiro Yamada^{1,2}

1.千葉県立船橋高等学校、2.東京大学教育学研究科研究員

1.Chiba Prefectural Funabashi High School, 2.Research Fellow, Graduate School of Education, University of Tokyo

日本地球惑星科学連合の英語表記は Japan Geoscience Union となっており、Geo（地球）関連学会の連合組織であることを示唆している。言い方を変えれば earth science のことであるが、これは戦後発足した地学教育の「地学」earth sciencesに通じる。「地学」には天文分野も含まれており、ある意味では現在の「地球惑星科学」に近い内容だからである。しかしこうした領域設定がどのような背景で1940年代の時点で出て来たのか必ずしも十分に説明されていない。戦後地学教育の成立に主導的な役割を果たした地質学者の一人小林貞一（1901-1996）の足跡を追うことによってこの問いに答えられないか検討してみたい。

小林が1942年に公にした地学教育の振興策についての論考ですでに「地学を地球を対象とする諸学の総称と解するのが最も適切であろう」として、地球を宇宙の一天体として見る天文学や、固体地球物理学、海洋学、気象学まで含めていた（小林 1942: 1474）。戦後になるとその主張は明確化し、「地学」とは「地球の科学（Earth Sciences）の事である」として、古今書院の地学辞典（1935）や旧制高校の地学科の内容を例に、地質学を主体としつつ地球物理や測地、地球化学、天文気象、気候、海洋、湖沼等を含めた分野と定義した（小林 1946 : 17）。同じ時期に地学教育を推進した藤本治義（1897-1982）が地質学鉱物学を中心に「地学」を考えていたことをみれば、小林の認識の新鮮さがわかる。

このような小林のある種の確信に満ちた主張の背景には1930年代までに知られるようになってきた宇宙の進化や太陽系の形成についての諸説があったと考えられる。

たとえば天文学者の一戸直蔵（1878-1920）が翻訳したアレニウス（Svante August Arrhenius, 1859-1927）の関係書は、『宇宙開闢論史』（小川清彦と共訳）（1912年）、『宇宙発展論』（1914年）、『最近の宇宙観』（1920年）と出版されていた。一方、京都帝大で宇宙物理学の分野を開拓した新城新蔵（1873-1938）の天文関係書には、『宇宙進化論』（1916年）、『天文大観』（1919年）、『最新宇宙進化論十講』（1925年）、『宇宙大観』（1927年）などがある。またハッブル（Edwin Powell Hubble, 1889-1953）の *The Realm of the Nebulae* が『星雲の宇宙』として翻訳されたのは1937年のことだった（相田八之助訳、恒星社）。

小林が京都時代に新城の一般向けの講演を聞いたかどうかかわからないが、1930年代にアメリカで在外研究をした際に、ヨーロッパを含む多くの博物館を見学したことも考慮に入れると、このころまでの地球像の提示が宇宙や太陽系の生成を含むものになっていたことを実感していたことが彼のジオサイエンス観の背景にあったと推測されるのである。

引用文献

小林貞一 1942: 地学の特質と教育方針, 地理学, 10, 1473-1494.

小林貞一 1946: 地学とは何ぞや, 地球の科学, 1-1, 17-19.

キーワード: 小林貞一、ジオサイエンス、地学教育、宇宙進化論

Keywords: Teiichi Kobayashi, geoscience, earth sciences education, theory of the evolution of the universe